

遠く離れて

30過ぎたころに
しばらく遠く離れて
ひとり住み慣れぬ町
赴任したこと思い出す

小さな部屋で 何一つの音なく
埋まらない空間を
湯割り一つで満たす

そのころモバイルもなく
声聞くに必要なコイン
電話越しの声に
ひとりでないことを知る

そのころの仲間に
同じような人もいた
まだ幼い子見るため
毎週帰宅していた

朝の光が まだ差し込まない
暗い道コートの際を
掴んで肩丸める

そのころモバイルもなく
紙の写真ふところに
笑顔で写る家族が
心温める